



篠崎恵美子／藤井徹也 著
 本体 1800 円＋税
 B5 判／医学書院／2015 年

評者 工藤美子 兵庫県立大学看護学部教授

よりよいケアを提供するための 看護コミュニケーション

母性看護の実習で、何かをしてあげることが看護であると誤解している学生は、自立している妊婦さんや褥婦さんには「何もすることがない」と困惑する。そして、してあげることが情報提供することだと考えた学生は、その人自身を捉える前に、この人はこういう人だからという思い込みから、「この情報が必要」と、パンフレットづくりに邁進する。そんな学生に、まずは本書第10章のコラムに掲載されているレオ・ブスカリア博士の詩を紹介したい(p.113)。

私の話を聞いてください、と頼むとあなたは助言を始めます。私はそんなことを望んでいないのです。

私の話を聞いてください、と頼むとあなたはその理由について話し始めます。申し訳ないと思いつつ、私は不愉快になってしまいます。

私の話を聞いてください、と頼むとあなたはなんとか私の悩みを解決しなければならないという気持ちになります。おかしいことにそれは私の気持ちに反するのです。

祈ることに慰めを見出す人がいるのはそのためでしょうか。神は無言だからです。助言したり、調整しようとはしません。神は聞くだけで悩みの解決は自分にまかせてくれます。

だからあなたもどうか黙って私の話を聞いてください、話をしたかったら、私が話し終えるまで少しだけ待ってください。そうすれば私は必ずあなたの話に耳を傾けます。

患者との専門的なコミュニケーションは、患者によりよいケアを提供するために必要不可欠なものであり、まずは、相手の言わんとしていることをしっかり聞き、その意味をくみ取ることからよいケア提供は始まります。また、コミュニケーションは双方向的で、互いの関係性を構築し、さらに相手の人となりを知る道具です。

本書は、3部構成となっており、看護するなかで用いられるコミュニケーション、つまり対象の人となりを理解し、対象の視点に立ちその人が抱えている問題や課題を明らかにするためのコミュニケーションの方法を、1つひとつ紐解きながら解説しています。この本に書かれていることは、『助産雑誌』2014年10月号の特集「コミュニケーション術をみがいて、いいお産をめざす」の座談会で明らかにされたコミュニケーション術を、理論的に裏づけてもいます。

妊産褥婦を対象とする領域で看護を展開する時、本書で紹介されているコミュニケーション技法を用いて必要な看護を考え提供するためにも、そして、何かをしてあげるのが看護という思考から脱するためにも、看護や助産を学ぶ学生や新人看護職にお勧めしたい1冊です。

①